

50. 《横浜の誕生と、絹の道》

日米和親条約で開港したのは、下田でした。アメリカの駐日領事ハリスは、さらなる交易を狙い、江戸や品川の開港を迫ります。しかし遠浅で大きな洋式船が接岸できないことから、東海道から少し離れた寒村に、新しく港と外国人居留地を建設します。それが横浜でした。

イギリスは、アメリカに遅れて日英和親条約を結びますが、開港は長崎と箱館（函館）のみでした。そこで、駐日総領事オルコックを送り込み、猛然と更なる交易促進を狙います。そして横浜開港1年前に、日英修好通商条約を結び、横浜も開港対象に加えました。

1858年（安政5）7月1日、横浜港が開港。そこに入港してきたのは、イギリスの商社でした。（注1） 同月29日、手こずっていた日米修好通商条約が締結。実は、このとき、長崎港に入港していたアメリカ軍艦からコレラが長崎に伝染し、西日本、東海道を経て、2ヵ月後には江戸まで広がります。（注2）

1860年（万延元）、幕府は、日米修好通商条約の批准書をアメリカに届けるべく、小栗忠順（注3）らを遣米使節団として米艦ポーハタン号に乗船させ、また咸臨丸で勝海舟や福沢諭吉らを同行させます。遣米使節団は、アメリカで熱烈的な歓迎を受けました。

横浜が開港されるや、生糸・カイコが爆発的に輸出されます。ヨーロッパのカイコが病気で壊滅的だったからです。関東の生糸集積地だった八王子から横浜まで、大八車が往来する「絹の道」ができ（注4）、開港5年目には外国商館数は110に達しました。

注1：商社の名前は、ジャーディン・マセソン商会です。イギリスの商社で、中国貿易では筆頭の大会社でした。横浜支店のトップはウィリアム・ケスウィックです。さっそく居留地の1番地に、白亜の洋館を建築。その洋館は、英国一番館と呼ばれ、鹿島建設創業者が請け負いました。鹿島建設の発展は、この建築の成功からです。また横浜支店設立と同年、長崎にはジャーディン・マセソン商会代理のグラバーが、グラバー商会を設立。

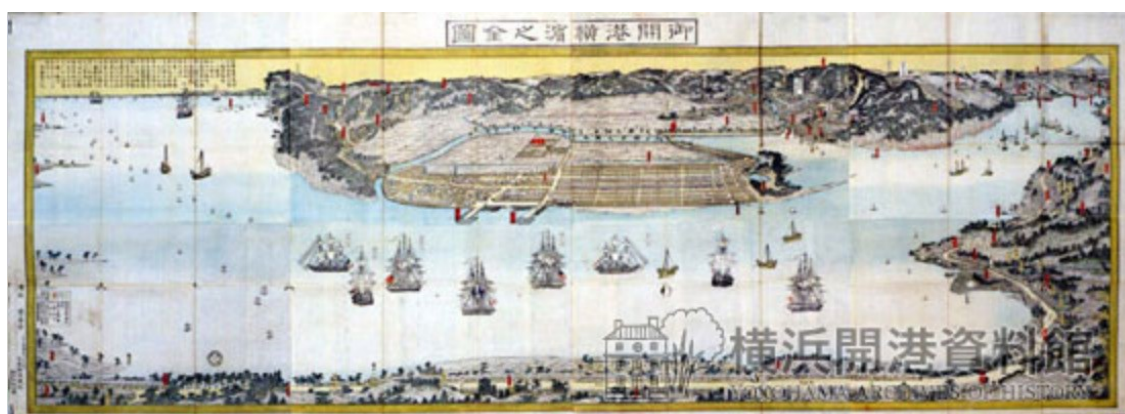
注2：このときのコレラは、2年間に亘り流行し、全国で28万6千人が死亡したとも伝えられています。

注3：小栗忠順（ただまさ：生没年：1827－1868年）は、ワシントン海軍工廠を視察しており、1865年（慶応元）、横須賀製鉄所（現横須賀造船所（在日米軍海軍施設））を建設。

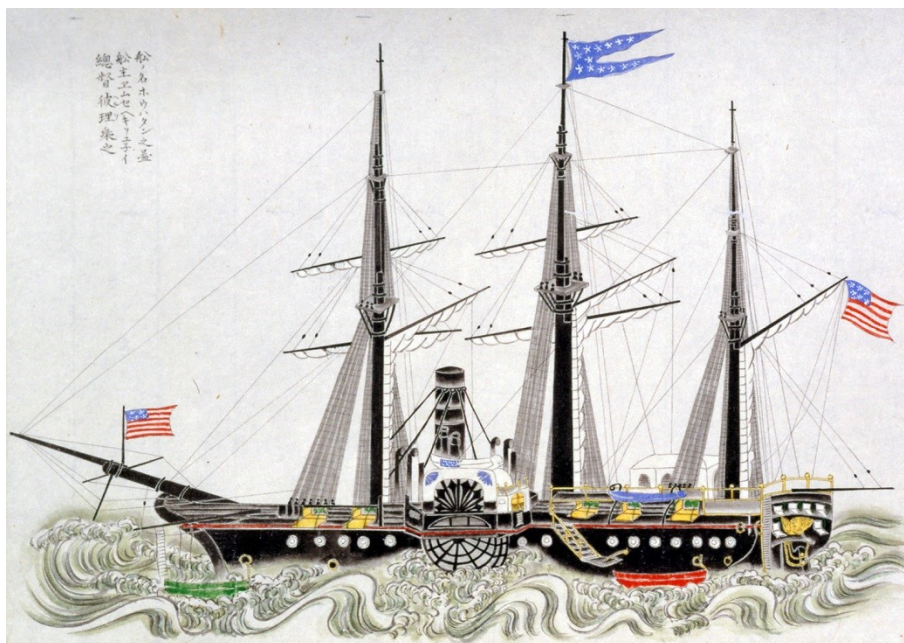
注4：日本の生糸は品質がよく、カイコも病気に強かったことから、人気が出ました。しかし粗悪品が輸出されることもあって、明治になり、富岡製糸工場が作られて絹織物産業の拠点だったフランスのリヨンから指導者を招いて改善していったのです。ですから、世界遺産の富岡製糸場と同様に、国際的評価が与えられるべきは、横浜開港と絹の道の遺産群だと考えます。なお絹商人の原善三郎の住居跡は、野毛山公園や三溪園となっています。

写真は、①御開港横浜之全図（横浜資料館 五雲亭貞秀画 1860年）、②ポーハタン号（『ハウハタンノ図』（国重要文化財「彼理横浜入津図〈ペリーよこはまにゆうしんず〉」より）鷹見泉石関係資料・古河歴史博物館所蔵）、④遣米使節団（右端が、帰国後勘定奉行なって横須賀造船所を建設する小栗忠順：館林城の再建をめざす会HPより）、⑤絹の道（blog「街道歩き旅」掲載図）

①



②



③



④

